

教職大学院

Newsletter

No. 23

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2010.06.25

全国をリードする協働プロジェクト

福井大学教職大学院が開設3年目を迎え、ますます充実・発展されておられますことを心からお喜び申し上げます。県教育委員会からは、一昨年度15人、昨年度は24人の教員がお世話になりましたが、今年度は新たに15人が研修をさせていただいております。教職大学院の先生方には、何とぞ御指導・御鞭撻をよろしく願い申し上げます。

さて、教職大学院は、確かな指導理論と優れた実践力を備えたスクールリーダーを養成することを目的とし、今年度開設の山梨大学を含めると、全国25の大学に設置されています。そして、各教職大学院では、それぞれの地域特性を生かしながら、理論と実践の融合を念頭においた特色ある教育が展開されていますが、福井大学の体系的・実効的なカリキュラムと学校現場との双方向的な教育活動は、全国の注目を集めているところです。

今年2月に福井大学で開催された「日本の教師教育改革のための福井会議」の中で鈴木寛文部科学副大臣は、「教員養成改革は、教壇に立つ前の段階から教師になった後の管理職研修に至るまでのすべてをシステマティックに充実させる必要がある。」と述べられた上で、福井大学教職大学院の取組みを「将来の日本の教師教育改革のモデルにしたい。」とも発言されました。そして、拠点校の在り方についても、「教員が教え合いながら学んでいる。コミュニティーで学ぶ意義や必要性を再確認することができ、このスタイルを全国に広げたいという意を更に強くした。」と高く評価されました。このような福井大学ならではの教育内容と指導方法は、理論と実践の往還を可能とし、教育現場における課題研究の充実、ひいては、本県の学校教育全体の活性化にも密接につながっていくものと信じております。

ところで、県教育委員会では、昨年度、「元気ふくいっ子学力向上センター」を開設したのをはじめ、今年度も学力向上

福井県教育庁企画幹（学校教育）松田 通彦

推進に係る様々な新規事業を立ち上げ、子どもたちの更なる学力向上を目指しております。また、全国知事会「第2回先進政策創造会議」において「優秀政策（ベストプラクティス）」に選ばれた授業名人制度を充実させるなど、教員同士が共に学び、共に支え合う本県独自の教育風土をより豊かなものになりたいと考えております。

近年、経済界では、産学官民連携事業という言葉がよく聞かれます。教育界におきましても、同じように、学校と教育行政、研究機関と学校現場等の間で、一層有機的な連携が必要不可欠であります。

福井大学の取組みは、学校と大学と教育委員会がまさに三位一体となり、理論と実践の両面にわたって優れた資質能力を有する教員の育成を目的とした、全国をリードする協働プロジェクトと申し上げても過言ではないと思います。そして、教育現場のニーズと大学におけるシーズをマッチングさせる役割こそが、私ども教育委員会に求められている重要な使命であると自負しているところであります。

どうか、福井大学教職大学院におかれましては、他県に誇れる本県のすばらしい教育力を、これからも維持・向上させるだけでなく、更に新たな段階にバージョンアップさせていくためにも、引き続き、特段のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

内容

- 全国をリードする協働プロジェクト(1)
- 平成22年度第1回運営協議会が開催(2)
- スタッフ紹介(3) 院生紹介(4)
- 拠点校だより(9)
- 教職大学院修了生の現在の実践と取り組み(13)
- 拠点校研究集会報告(15)
- ラウンドテーブルを企画して(18) 書評(20)

平成 22 年度第 1 回運営協議会が開催

平成 22 年 5 月 19 日（水）に、平成 22 年度第 1 回運営協議会が開催されました。梅澤章男・教育学研究科長のあいさつ、松田通彦・福井県教育庁企画幹のあいさつに続いて、全体協議及びグループ別協議を持ちました。なお、松田企画幹には、今回のあいさつ要旨を踏まえて、本号の巻頭言をお願いしました。

全体協議では、

- ①□ 福井大学教職大学院の運営（案）について
- ②□ 平成 22 年度年間行事計画（案）について
- ③□ 平成 23 年度学生募集スケジュール（案）について

協議され、いずれも原案どおり承認されました。

その後のグループ別協議は、拠点校・連携校、県教育委員会、市町教育委員会の 5 グループに分かれて、それぞれの現状報告や要望等の情報交換・意見交換が行われ、検討課題も出されました。いくつかを紹介します。

- ・現職教員の院生は、入学に伴う学費等を自己負担している。声を掛けるのにも財政支援があると助かる。
- ・困っていることとして、やはり授業料が高いということと、1 年目には 15 時間の加配があったが 2 年目にはそれがなく、この 2 つは何とかなしてほしい。
- ・市教委として大きな課題に学費補助があるが、院生への補助の必要性は十分認識しているので、例えば、リーダーとしての業績、功績を報告していただくなど、思案中である。
- ・インターンシップの中で院生も校外学習に参加してほしいが、経費負担をどうしたらよいか。方針を大学院側から出してほしい。



- ・院生が部活動を指導している最中に、生徒がけがをすることがあり、対応に困った。
- ・インターンシップに関するメディア取材が 1 年間入っている。職員会議、授業研究会、授業実践、自宅、大学でカンファレンスにも付いており、守秘義務のある事項も飛び交っている。配慮してほしい。
- ・教職大学院を既存の修士課程と同じように、個人の力量形成、キャリアアップとしてとらえているようだ。教職大学院は違うとアピールする必要がある。
- ・教職大学院に行きたいと言っている人がいる。どんなことをしているのか、年間のスケジュールを伝え、情報を流すようにした。毎週土・日曜日に大学に行くと思っている人もいる。院生を中心に情報を拡げていきたい。
- ・特に、小学校の拠点校では、毎年院生を出すことは難しい。拠点校を変えていくことは協定上可能か。
- ・義務教育課では、平成 21 年 10 月から学力向上センターを設け、「コア・ティーチャー養成事業」を始めた。教職大学院とタイアップすることで、取組を深めていくことができないだろうか。

（長谷川 義治）

Staff 紹介

巨田 尚彦 おおた たかひこ

「教育と研究」が学校教育の両輪であることは論をまたないのですが、退職を機に歩みを振り返ってみると、私にとってこのテーマのもとに悪戦苦闘した43年間であったように思います。

第一期の約10年間は、教科指導に大きなエネルギーをかけた時期でした。幸い教科指導に熱心な先輩教師から、実に多くのことを学ぶことができ充実していました。研究会などの活動も活発で、熱心な質疑や討議がなされました。受験指導を目標とする風潮も強かったのですが、パーソナルコンピュータが初めて導入され、数学の授業にプログラミングを取り入れる試みは生徒と共に時を忘れるほどでした。折しも、川喜田二郎氏や梅棹忠夫氏などの提唱する学問の技術はまさに目から鱗で、私も多くの刺激を受け、試行錯誤の連続でしたが夢中になって取り組みました。

次の第二期には、教科指導を通しての充実感はありませんでしたが、生徒指導、進路指導など生徒の生き方や在り方の問題を深く考えるようになりました。大きなテーマは生徒の意欲と学習の関係でした。学校教育では、数多いテストで生徒の能力を測る一面があります。しかし、テスト問題の質や、テストの実施の仕方などで、生徒の意欲が大きく変化していくのを目の当たりにして、「テストで能力がわかるか」は私にとって大切なキーワードとなりました。

第三期は長い教育関係機関勤務の時期で、戸惑いはありましたがここでできない研究をと心がけ、同僚と共に児童生徒理解のための調査システムの構築などに没頭しました。また、教育相談事業に携わることができたので、児童生徒は勿論、保護者、教師や一般の方々との面接、更には適応指導教室の取り組みなど、いわば臨牀的教育活動を通じた研究ができました。

第四期は、これまでの「教育と研究」の総決算としてアウトプットの時期で、極めて多忙でした。学校運営・経営を進める中で、教職員や関係の方々の子どもたちの教育に対する温かさやその力の大きさを身にしみて感じる日々

でした。管理職という立場での「教育と研究」は更に重いもので、リーダーシップを自覚したしっかりした研鑽が必要であることを痛感しました。

第五期は、公立高校退職後の半年後から私学教育に関わることになり、実に貴重な4年半でした。大学の教養部では、微分積分学と線形代数学の講義を通して、高校の数学教育のあり方も考えさせられ、とても楽しいものでした。この間、附属高校の校長を4年間兼務（うち2年間は附属中学校の校長も兼務）しました。福井県の私立高校には、1学年ほぼ2,000人もの生徒が学んでいます。私学は「建学の精神」という大きな教育理念のもとで、人間教育を柱に特色ある教育を展開しています。今まで見えていなかった私学の教育に身を置くことになり、毎日が学びの連続で新鮮でした。不易なものを大切にしながらも、常に次の時代を見据えて新しいことに挑戦し、進化し続ける学校であることは不可欠です。私にとっては、その責務を果たすため、加齢による体力と気力の衰えをいかに克服するかが大きな課題でした。この4年間は私の教師生活の最終章となりましたが、私学の温かい先生方と出会えたことは本当に大きな財産となりました。

今は、これまで沢山の力をいただいた多くの方々に、ただ感謝の念で一杯です。研究は自然に教育に伝わっていくものであるし、教育はこれを他の人に伝え共に喜ぶことにあります。私にとって「教育と研究」は大きな支えです。この度、微力ですがスタッフの一員として加わらせていただくことになりました。どうぞよろしく願いいたします。



院 生 紹 介

坂下 博行 さかした ひろゆき

(武生第三中学校)

今年度、教職大学院に入学した坂下博行です。教職 23 年目を迎えている社会科教員です。私は新採用以来、中学校の勤務経験しかありません（しかも、すべて越前市内の中・大規模校）。部活動指導や進路指導の面で、かつてはそのことが自分の強みであると思っていましたが、数年前からは逆に弱みであると感じています。狭い世界の中だけで過ごしてきたため、教師としての厚みがないように思えてきたのです。そんな折、教職大学院への進学を勧められ、多少の逡巡はありましたが、自分の世界を広げるためには必要であると考えて進学を決意し、今日に至っています。

私の勤務校では、全教室に校内 LAN が整備され、各教室に 1 台の割合でプロジェクタ、実物投影機、マグネット式のスクリーンなどの ICT 機器が配備されています。21 年度には「ICT を活用した楽しくわかる授業をめざして」というテーマで研究発表大会を行いました。研究主任として心がけていたことは次の二つです。一つは部活動指導や生徒指導等で多忙な同僚が、ICT 機器を無理なく授業に取り組むことが出来るようにすること。もう一つは、他の学校にも ICT 活用が広がるように、授業に取り入れやすい活用事例を提案することです。指導をしていただいた大学の先生方や同僚に支えられて、ICT 活用の日常化は進んでいき、2 年間の実践は一定の成果が得られたと自負しております。今後は授業のツールとしての ICT 活用にとどまらず、

教師の授業力そのものの向上を目指しています。そのために、中学校特有の「教科の壁」を超えて、チーム力向上のための研究・実践を行いたいと考えています。

まだ 2 回だけですが、合同カンファレンスにおいて、大学の先生方や他の院生の先生方からお話をお聞きすることを楽しみにしております。自分の学校でも取り入れられそうな実践のヒントをいただいたり、実践の迷いや悩みを吹き飛ばしてくれるような刺激を得たりと、この教職大学院での学びが、自分にとっての大きな活力源となっています。

このニュースレターが発行される頃には終わってしましますが、今は来週の指導主事訪問全体参観授業の授業研究会の進め方を計画しております。同僚の教員にも、「子どもの学び」に着目して、授業を見て欲しいと依頼し、授業研究に取り入れていきます。その結果を次回のクロスセッションで報告できることを楽しみにしております。よろしくお願いいたします。



西尾 幸代 にしお さちよ

(福井県特別支援教育センター)

本年度からスクールリーダー養成コースに入学しました。現在、福井県特別支援教育センターに勤務し、5 年目になります。

大学時代の指導教官は「常に自分の目で見て、肌で感じ、そこに携わる方から話を聞いて学びなさい」という方だっ

たので、学生時代から園、施設、学校、あるいは訪問教育の行われている家庭と



いろいろな現場に行かせていただきました。時には実習生として1週間～1か月程度受け入れていただき、学ばせていただきました。教育実習も特別支援学校はもとより幼稚園、小・中学校でも実習しました。そのなかで、とても魅力的で生き方のモデルとなる方々に出会い、さらにいろいろな立場の方の話を聞かせていただいたことで、「組織としての役割」や「協力しあうことの大切さ」を意識するようになりました。振り返ってみれば、充実したキャリア教育を受けてきたように思います。

現在の職場では主に「教育相談」を担当しています。当センターでの昨年度の相談件数は1,412件、述べ回数は9,079回となっております。中でも、実際に教育現場に向向いて授業場面で子どもたちを観察しながら、具体的な子どもへの理解の方法や支援方法などについて話し合う「訪問相談」が多いです。その中で私自身も先生方や保護者の方から子どもたちのかかわりについて多くのことを学んでいます。最近では、相談対象の児童生徒以外にも通常学級の中に支援が必要な子どもたちが数名いることから、個の対応だけでなく学級経営についても相談を受けることが多くなりました。私自身は、子どもも大人も「成長」のプロセスの中でとらえていき、その成長の可能性を信じた

い、子どもを取り巻く人間関係を大事にしてつながり合うことを大切にしたいと願いながら日々取り組んでいます。一人ひとりの子どもたちが目を輝かせて精一杯活動に取り組んでいる学級や“もっと分かってほしい”“知りたい”という欲求に満ち溢れた学級の授業に出会うたび、これまで通常教育の学習指導や生徒指導の中で活用してきた様々なスキルや工夫が、特別支援教育においても十分に活かせるのではないかと思います。つまり、今こそ「個の良さを活かした学級経営や授業づくり」が必要ではないでしょうか。

特別な教育的ニーズのある児童生徒の支援を考える時、特別支援教育と通常教育の互いの専門性を融合させながら支援を充実させていくことが必要だと強く感じるようになりました。それだけに再度、特別支援教育の専門性とは何かと振り返り、そして教職大学院の先生方からは通常教育の専門性とは何か、そのうえで質の高い「授業」「学級経営」とは何かについて学びたいと思っています。それらを自分の業務に活かし、訪問相談のメリットを活かした教育相談の在り方や今後の当センターの役割について考えていきたいです。どうぞよろしくお願いいたします。

竹林 史恵 たけばやし ふみえ

(福井市灯明寺中学校)

僻地の小学校でのどかに過ごした新採用の2年間以外は、ずっと福井市内の大～中規模の中学校に勤務しています。17年間学級担任をしておりましたが、その間、主に学年の生徒指導担当として、問題解決に奔走する毎日でした。次々に問題が起こったり、こじれたりした時には、「自分は一体何のために教師をしているのだろうか？問題解決に神経をすり減らすばかりで、生徒や自分の可能性を伸ばすことは、今の学校生活ではできないのか？」と思い悩んだことは、一度や二度ではありません。しかし、その時に自分の支えとなり、頑張ろうという気持ちを奮い立たせてくれたのは、共に仕事をする仲間達でした。「どうしたら学校・学年が良くなるか」「頑張っている生徒が生きる学校にするには」「頑張れない生徒にどう接していったらいいのか」等、じっくりと話し合うというよりも、多忙かつ

切迫した中で、素早い対応と解決を迫られながら、答えを出すという状況でした。その中で体験として得たも

のは数多くあります。しかしながら、自分としては大学を卒業して20余年。現場を離れることなく、最新の教育理念や実践について学び、それを悩める現場の仲間と共にぜひ活用したい。そんな思いを抱いていたちょうどその頃、教職大学院のことを知りました。ガイダンスを聞き、実生活との兼ね合いも考えながら、ようやく今年度、念願かなってスクールリーダー養成コースに入ることができまし



た。

本校での勤務は4年目となり、昨年度から学年主任をしております。担任時代とは視点が変わり「先生達一人一人の可能性を引き出し、その力を組織として最大限に活かす」ことを目指しています。教職大学院でのクロスセッション(教授陣も交えた4~5人のグループで互いの現状や問題点を伝え、討議する)は、自分の状況を他の先生方に伝えることを通して客観的に自己を見つめる絶好の機会です。また、終了後にレポートを書くことで、受けたアド

バイスや他の方の発表から学んだことを整理し、自分の学びをより明確にすることができます。

「日々体験しながら学び、学びを現場に活かす」という自分の思いがスタートして2ヶ月、まだ形になったとはいえませんが、教職大学院の先生方、共に学ぶ院生の方々、そして本校をはじめとする現場のたくさんの仲間達……。どんどん輪が広がっていく手応えを感じながら、今後も夢と目標をもって学んでいきます。よろしくお願ひします。

森北 良嗣 もりきた よしつぐ

(若狭町立みそみ小学校)

若狭町立みそみ小学校の森北良嗣です。本年度より、教職大学院スクールリーダー養成コースで研修を深めることになりました。よろしくお願ひいたします。

時の過ぎるのは早く、あっという間に教員生活が20年を過ぎました。この間、町内の小中学校の教壇に立ち、子どもたちとともに学んできました。平成9年から7年間勤務した上中中学校では学力向上フロンティア校などの指定を受けて「表現力の向上」をキーワードに研究を進めました。私は社会科の一教員として、県社会科研究協議会の考え方を基盤として、話し合い活動を取り入れた授業作りに取り組みました。その後の小学校勤務では、社会科や総合的な学習の時間を中心に、子どもたちが意欲的に取り組む問題解決学習、探究的な学習の授業作りに力を注ぎました。振り返ってみると、これまで授業に話し合い活動を効果的に取り入れ、子どもたちのつながりの中で学習を深めていければと試行錯誤してきたように思います。このような教員生活を続ける中で、この教職大学院があることを知りました。今まで取り組んできたことを省察し、さらによい実践になるよう高めていきたい。また、今までの実践を理論と結びつけたいと思い本学科に入学しました。

ところが、入学して研修を進めていく中で、これまでの

自分の実践がまだまだ未熟であったことに気づきました。教師主導の授業から脱却し、子どもの学びを中心に

授業を組み立てていくこと。探究的な学びは、社会科や総合的な学習などの長いスパンで単元構成する教科だけでなく、いろいろな教科に広げていくことができること。教師が一人で行う研究には限界があり、学校として協働的に研究を進め、深めていく必要があることなど。そして、何よりも自分自身の力不足を痛感しました。大学院でふれた他の院生の実践や先生方のお話から、自分にとって貴重な気づきをいただきました。

このような多くの気づきを得ることができる大学院に入学できたことをうれしく思います。2年間の在学期間にこれまでの実践をじっくり省察したいと思います。また、学んだことを自分の実践に生かし、ひいては勤務校の協働研究を充実させていけるように力をつくしたいと考えています。今後ともご指導をよろしくお願ひいたします。



宮澤 啓子 みやざわ けいこ

(鯖江市片上幼稚園)

みなさん こんにちは！

4月から教職大学スクールリーダー養成コースでお世話になっています鯖江市片上幼稚園宮澤啓子と申します。

3クラス 園児数 32名、鯖江市公立幼稚園7園の中で一番の小規模園 片上小学校に併設され、校長先生が園長を兼任される園で、副園長の立場にあります。

7園の幼稚園を一周し、念願だった片上幼稚園に赴任することができてとてもうれしく、毎日園児達と楽しく過ごすことができます。

幼稚園は福井市との境にあり、文殊山の山裾にあるのどかな田園風景の中にあります。現在は新緑の中、大きな桜の木の下で食べる給食が園児達に大好評です。

鯖江市役所職員として幼稚園のクラス担任を21年、鯖江市教育委員会主事も2年務め、副園長の立場では8年目になります。鯖江市以外に勤務したことがなく、「世界も視野も狭い」ことを感じ、もっと勉強しなければいけないと考え、迷った挙句に出願をしました。

昨今の経済情勢や子育て支援対策でしょうか、福祉施設には保育料軽減のための施策があり、共働き家庭の多い地域にあっては福祉施設の入所児が増えています、しかしそのような状況にあっても、あえて幼稚園教育を望んでくださる方も多く、3歳児入園には抽選があり入園をお断りしたこともあります。

一方で、現在鯖江市立幼稚園の職員は、7割が非常勤講



師の立場にあります。片上幼稚園のクラス担任も3名の内2名は非常勤講師です。その上、正職員の中にあっても過去にも採用が抑えられていた経緯から、福祉施設からの人事交流による職員が増えており、幼稚園教育に対して課題が見えてきています。幼稚園を選び、幼稚園教育を望んでくださる方に対しての責任も感じています。

また、近年特別支援対象児もしくはそれに近い傾向を示す園児が増えてきており、園児も職員も困難な状況に置かれることがあり、現在も毎日悪戦苦闘しています。限られた人材のなかでの園運営には困難も伴っており、多くの知識を得ることの必要性を感じています。

これらのことを踏まえ、大学院では幼稚園教育と同時に、特別支援教育についても学びたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

宇野 秀夫 うの ひでお

(福井市社中学校)

福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースで学んでいる宇野秀夫です。

若い頃に福井大学教育学部附属小学校で努めさせていただいた経験があります。当時のことを思い返すと子供の思いを大切に、子供たち自身が学びをつくっていく。そんな学習や授業の大切さを学んでいました。その後、公立中学校に転任し、学んだ指導方法や指導技術のいくつかだけでも公立学校で実践できるようにしてきました。

現任校の福井市社中学校は福井市の西部に位置し福井市の発展と共に発達してきた地域



です。東に足羽三山，南に運動公園があり，自然環境に恵まれています。また，古くは奈良時代に東大寺の荘園として発展した道守の荘があり，歴史的や文化的にも恵まれた地域です。いわば，生徒達の学ぶ教材は豊富にあります。また，社中学校では，教師集団が共通認識のもと，時間と手間を顧みずに学校生活の充実や授業規律の向上に向けて生徒に対する指導を徹底してきました。部活動においても厳しい練習を通して生徒一人一人の技術や体力を伸ばすとともに社中学校生徒としての自覚を高める努力を続けてきています。そんな社中学校に授業研究の楽しさ，面白さを広めていきたいと考え，教職大学院で学ぶことにしました。

今年度から研究主任というポジションで仕事をさせていただくことになりました。研究テーマ「ともに学び，ともに輝く生徒の育成」，サブテーマ「自分を表現し，関わり合う授業づくり，認め合い，高め合う集団づくり」を掲げて，研究に取り組んでいます。生徒が主体となりお

互いの学び合いをしながら，自ら学んでいく生徒の育成や集団づくりをしていきたいと考えています。福井大学は教職大学院に見られるように大学が現場と共に協働研究を行っています。教育理論，学習観，学習方法など，教育に関する様々な教育資産を持っています。それに，産官学連携などを通じて地域との幅広いネットワークをつくっています。それらの教育資産やネットワークの一部でも本校の教育に活用させて頂き，学校の活性化を目指していきたいと考えています。

教職大学院には教育研究に熱い思いを持っている先生方が学んでおられます。その先生方の学校での実践を学ぶことにより，本校生徒の学ぶ力を育成するとともに，学校運営のマネジメント力を組織していきたいと考えています。まだスタートしたばかりですが，教職大学院でしっかりと学んでいきたいと考えています。よろしくお願ひします。



平成 23 年度福井大学大学院 教育学研究科教職開発専攻(教職大学院) 学生募集 スケジュール

事前説明会	平成22年 7月3日(土) 15:00~17:00 アカデミーホール
出願期間	平成22年 9月6日(月) ~ 9日(木)
ガイダンス	平成22年 9月11日(土) 10:00~12:00 アカデミーホール
選抜期日	平成22年 9月25日(土) 9:00~ 教育地域科学部 1号館
合格者発表	平成22年10月5日(火) 10:00
入学手続	平成22年12月13日(月) ~16日(木)

問い合わせ先：福井大学学務部入試課

[本学ホームページ <http://www.u-fukui.ac.jp/>]

拠点校だより

充実・深化する至民中教育

地域ふれあい体験 第1弾 ～さつまいも 植えてみよさ!～

福井市至民中学校

平成20年度の移転開校から早くも3年目を迎えました。今年度の至民中学校のスローガンは「充実・深化する至民中教育」です。このスローガンのもと、研究テーマである「学びと生活の融合」の完成・定着に日々取り組んでいます。スローガンにもあるように今年度は「進化」ではなく「深化」です。1つ1つの活動をより充実させ、新たなものを創造していきたいと考えています。その1つとして至民中の3本の柱の1つである「地域連携」で新たな取り組みを行いました。

5月21日の放課後、34名の生徒たちは地域ボランティアガイドさんや南江守生産組合のみなさんとともに、さつまいもの苗植えに挑戦しました。校舎から眼下に広がる美しい農場で生徒たちに土に親しむ農業体験ができないかという学校の思いを、南江守生産組合のみなさんが快く引き受けてくださり、大切な畑を提供して下さって実現したふれあい体験です。参加した生徒は自ら進んで希望してきた生徒で、前々日から雨で実施できるのか心配し、インターネットで天気予報を調べるほどの熱心さでした。

体験では、さつまいもの苗の植え方を学んだ後、黒い

ビニールで覆った広い畑に入って1人20本ぐらいつつ植えていきました。黒いビニールの役割や葉っぱの向きを揃える大切さなどを習いながら、どの生徒も笑顔で土とまみれました。ビニールに苗を植えるための穴を開ける体験

までもさせていただきました。今後は、いのししなどの動物からさ



つまいもを守るため、電気柵まで用意をしていただけるようで、土の温かさと人の温かさを学ぶことができた地域ふれあい体験となりました。どの生徒も、美しい汗の流れた笑顔が夕日に映えて輝いていました。

このように1人の教員がやりたいと思ったことを口にする、運営部会で形になり、地域の人たちが快く協力して下さるような学校・地域に深化してきています。(高間 祐治)

異学年型クラスター制 ～始まりは、クラスター合宿～

至民中の3本柱の1つ「異学年型クラスター制」を取り入れた活動を紹介します。異学年型クラスター制とは、異学年のホーム(学級)が隣接されて構成されたクラスターが基盤となり、上級生を中心に行事だけでなく、Cタイム(総合的な学習)や教科の学習、そして生活全般について協働的に生活設計・問題解決に当たっていく組織のことで、

4月、クラスター長(3年)、副クラスター長(2年)を各クラスターごとに選挙で選びます。そして、各ホームの男女ホーム長を含めた約10名でクラスター委員会を組織します。このクラスター委員会がクラスターの中心となって自治を行っていきます。その最初の活動としてクラスター合宿があります。生徒たちが、「どんな

クラスターにしたいか」という願いを出し合い、その達成のために各グループ(プロジェクトと呼ばれる)を立ち上げ、クラスターの目標、ルール、クラスター・ホーム旗の製作などさまざまな活動を行います。至民中学校は毎年クラス替えを行っているため、合宿に参加するときには、まだあまり親しくなく、どことなくぎこちない状態です。1年生は、入学したばかりで何もわからない状態です。そのため、この合宿は親睦を深めることも目的の1つになっています。上級生が下級生に学校生活のことやプロジェクトのことを語ることで、合宿前には不安がっていた1年生も「先輩が優しくしてくれたので楽しかった。」という感想を持つようになります。

現在、学校では各プロジェクトが合宿で決めたことを実行し、より良いクラスターを目指してがんばっています。生徒たちが思うような結果はなかなか出ませんが、試行錯誤しながら粘り強く取り組んでいます。そこには、生徒たちによる「クラスターをよくしたい」「去年の先輩・クラスターを超える」という気持ちがみなぎっています。至民中学校にお越しの際は、そういう場面もぜひご覧ください。HPにも活動が載っておりますので併せてどうぞ。(金鱧 善朗)



福井精華学園 啓新高等学校 宮腰 貴久

本校は、住所（福井市文京4丁目15-1）が示すように、教職大学院のある福井大学文京キャンパスとは、まさに道（芦原街道）を挟んで向かい側に隣接しており、福井の教育の場（学び舎）の中心に位置する私立の高等学校であります。昭和37年4月福井精華女子学園（昭和2年9月創立）を母体として福井女子高等学校が開校。平成10年4月男女共学に伴い、啓新高等学校となって新たにスタートし、今年で13年目（高校開学48年目）を迎えました。本校の建学精神である「真・善・美」「行学一路」に基づく個の完成を目指すためのキーワードを「可能性の挑戦」として掲げ、本年度も教職員一同、生徒のために情熱を持って教育活動に取り組んでいます。

今から6年前の平成16年に本校は、福井大学との連



携協定を結び、翌年の平成17年4月より、学校長が教職大学院の前身の福井大学大学院 教育学研究科 学校改革実践研究コースに入学したのを機に、授業改革プロジェクトチームが編成されました。福井大学から、寺岡教授、松木教授、森教授、柳澤教授の先生方と本校の教員10名が月1回程度の全体会をもちながら、それぞれの科（普通科・情報商業科・生活文化科・調理科・福祉科）での授業改革の取り組みを行っていきました。私はそのとき、普通科での授業改革の取り組みに参加した一人です。普通科での取り組みは「特進表現活動」と名付け、普通科特進コースの2年生において、1限から6限までを使って、あるテーマに沿って用意された資料を用いて小論文を作成し、発表して（発表を1年生が見学）、振り返るといような形で行いました。この取り組みは、次の年も行われました。その後、家庭科の坂本先生が校長に引き続き大学院に入学したので、家庭科でという方針になり（担当：森教授、松田准教授）、一昨年までの2年間自分の授業を中心に研究を行いました。この一連の流れを通して、本校が教職大学院の拠点校になりました。

私が教職大学院に入学することが決まった昨年（平成21年）3月末から4月当初、森先生との打ち合わせの中で、以前のような話し合いの場が作れないだろうか、少しずつでいいので授業研究に対する意識を学校全体

に広げていくことができないだろうかという話の中で、メンバー自身が仕事の負担以上にモチベーションや、やる気を感じるような場を作りたいということで、校長先生に相談し、前回のメンバーを中心に声をかけ、私を含め8名の授業研究チームを立ち上げました。昨年度はまず、チームの中で「授業を見合うという環境を作ろう」ということから始めることにしました。1年間私なりに試行錯誤してきましたが、まだまだ先生方の授業力向上につながるようなことはできなかったように思います。また学校全体に授業研究という意識を浸透させていくにはまだまだ不十分であると痛感させられた1年でもあったように思います。一方、チームのメンバーである川合先生が今年度、私とともに教職大学院で学ぶようになったことは、何よりも大きな成果であることは間違いありません。また、計13回の授業研究会が開催できたこと、メンバー全員ではなかったものの、4名の先生方が、延べ6回の公開授業を行ったこと、さらには福井大学の学生が卒業研究として、本校で生徒に研究授業を行ったという高大連携へ新たな展開を見せたことは今年度につながるものとなりました。

今年度は「教員協働での授業研究という文化を定着させるきっかけづくりをしたい」という目標を掲げ、スタ

ートしました。昨年度のチーム作りは文字通りゼロからのスタートであったのに対し、今年度は昨年の8名中5名が継続してメンバーとして残り、新たに本校2年目の先生が1人、校長の提案で新任の先生5名全員がメンバーに加わり、計11名のチームとなりました。福井大学からは昨年度に引き続き、森教授、佐分利教授、伊禮教授と、今年度より吉村准教授が担当して下さることになりました。まず1学期は、教職大学院で学んだ坂本先生、学んでいる川合先生と私が、生徒の学びを中心とした公開授業をし、授業研究会の場で振り返りを行っていく予定です。今年度の最終目標として、公開授業を行った先生方に、授業実践記録をまとめてもらい、授業研究会として研究紀要を作り、学校全体に発信しようと考えています。そのためには、授業研究会のメンバー一人一人が、意義を見出し、何らかの形で授業研究に取り組み、お互いに意見し、理解を深めていく必要があります。本校に教員の協働研究というコミュニティの文化を根付かせるため、焦らず地道に本校の（教員や生徒の）ために間を取りもつことが、会のリーダー（時にはコーディネーター）としての立場だと考え、会を運営していきたいと思っています。そして、この授業研究の方向性が学校全体に必ずいい影響をもたらすと確信しています。

美浜町美浜中学校 川畑 成央

本校は、美浜町の中心部に位置する町内唯一の中学校です。昨年8月に新校舎が完成しました。美浜町では町全体でエネルギー環境教育に取り組んでいることもあり、その一環で新校舎には太陽光発電や風力発電などの設備が整えられています。今年8月には新グラウンドも完成する予定で、まっさらでピカピカの、非常に恵まれた環境の中で生活できる幸せを感じながら、日々の教育活動に取り組んでいます。

全12学級282名の生徒たちは、全体的に素直で明るく、さまざまな行事や部活動に全力で取り組むなど、自分の興味のあることに対しては大変意欲的に活動することができます。その反面、難しい課題をじっくり考えることや苦手なことに対しては、消極的などころも見られます。

このようなことから、「自ら考え行動する生徒」「思いやりのある生徒」「粘り強く取り組む生徒」をめざす生徒像とし、特に「自主性の伸長」と「学力の向上」を今年度の



重点目標に設定し、全教員一丸となって取組を進めているところでは、

「学力の向上」の実践の一つとして、授業研究・授業改善の取組があります。本校では、「学び合い、高め合う個と集団づくり」という研究テーマのもと、3年ほど前から授業研究・授業改善に取り組んできました。本校の授業研究の大きな特徴は、授業研究を小グループで行っているところです。30名の教員を、5人ずつの6つのグループに分け、そのグループ内で授業を公開し合い、年間を通して授業研究を行っていくというものです。グループは、教科の壁、学年の壁、経験年数の壁を取り払って、構成されています。そのグループ内で年1回は自分の授業を公開し、その日のうちに授業検討会をもつことにしています。

小グループで授業研究を行うメリットの一つとして、授業を参観しやすい体制であるということが挙げられます。教務主任をお願いをして、授業公開が実施される日には、そのグループのメンバーが授業を参観することのできる時間割を組んでもらっています。数人の参観ですので、担当クラスを自習にさせる必要もなく、1時間きちんとグループのメンバーの授業を参観することができます。

小グループで行うメリットのもう一つは、授業検討会での意見交換が行いやすいということです。以前のような教員全体で授業研究会を行っていた頃は、一人一人の発言の回数も絞られ、それぞれの感想を述べ合うだけで、時間がかかる割には十分な授業の振り返りができていませんでした。小グループであれば、大勢の前では言えなかったような質問も気軽にできますし、一人一人が発言することによって、自分がその授業で何を学んだのか、自分の考えを整理し明確にすることもできます。授業での気づきは付箋に書くようにし、授業検討会では付箋を並べて授業のポイントを整理しながら話し合うことで、効率的に検討会が進め

られるようにも工夫しています。生徒がどのような活動を行い、どのような発言をし、どのような学びを行っていたか。そこに焦点を当て、授業研究を進めていくように心がけています。

先日、6月7日に第1回目の授業公開と授業検討会が行われました。異動によって教員のメンバー構成は大きく変わりましたが、自由で活発な授業検討会の雰囲気は変わることなく、どのグループにおいても熱心な意見交換がなされていたように感じます。「担当教科外の教員の意見を聞けるというのは新鮮で、新しい発見も多く、非常にいい勉強になる」「いろいろな人の意見を聞きながら、授業に取り組むことがやや楽しくなってきた」という感想がありました。授業者の負担感が大きかった授業公開が、たくさんの学びや発見がある、より楽しいものへと変化しつつあります。

教職大学院の先生方に授業公開・授業検討会に参加していただいているメリットもあります。外部の方のご意見は大変貴重で、今後の研究の方向性に自信をもつことができました。まだまだ未熟な部分もたくさんありますが、この研究が子どもたちの力につながるように、今後も進めたいと考えます。



教職大学院修了生の現在の実践と取り組み

各学校では、そろそろ今年度前半の教育活動の山場を迎ようとしています。そこで、教職大学院修了生である先生方に現在の実践と取り組みを報告していただくことにしました。この報告を通して、教職大学院での学びが各先生方の現在の実践や専門的成長、さらには学校の協働研究にどのように活かされているかを読み取っていただきたいと思います。

福井県特別支援教育センター 田上 博一

教職大学院を卒業して2年、私は現在も「福井県特別支援教育センター」に勤務しています。当センターは、本県の特別支援教育を推進する役割を担っている機関です。特別支援教育に関する教員研修や理解啓発のための事業などを実施しています。特に、最近では発達障害に関する理解が進んだことで、周囲と違う行動が見られて子育てに不安を感じる保護者や気がかりな行動を見せる子どもへの対応に悩む教員から教育相談を受けることが増えています。

相談相手からは「専門家」として効果的な指導方法や画期的な教材を提案することを期待されているのかもしれない。しかし、神様でもない私にできるはずはないのです。私にできることは、相談相手の思いや悩みをじっくりと聞いて、どうしたらよいかを一緒に考えることぐらいです。一度じっくり状況を整理していただくと少々時間はかかるかもしれませんが、次の一手を見つけることができます。

特別支援教育は「特別」ではありません。一人一人の子どもを理解することは、障がいの有無や気がかりな行動の有無などに関係なく、教員は必ず行っていることでしょう。子どもの特性を把握し、「最大限に力を発揮できるように」「意欲的に取り組むように」と願って、授業やかかわり方を工夫されていることと思います。

先日、ある小学校で授業を見せていただきました。昨

年から授業中に教室を抜け出すなど気になる行動が多いお子さんについて相談を受けていました。進級してからの様子を見せていただいたのですが、授業中の様子が一変していました。課題に取り組みないでいる子どもを放任するでもなく、注意を繰り返すでもなく、活動を促す声掛けや側についてアドバイスするなど子どもが勝手な行動を見せる前に様々な働き掛けが行われていました。後で担任の先生からお話を聞ききすると、「いろいろ工夫しているのですが、うまくいったりいかなかったりしています」と笑顔で話してくださいました。校内で共通理解が図られて、教室を抜け出した場合にはすぐに他の先生が対応してくれるなど、安心して授業を進められることも要因のようでした。手立てを講じれば、必ず効果が上がるとは言えません。しかし、そのために費やした時間や労力は、決して無駄ではなく、効果を上げるためには必要な時間なのだと思います。教材や指導方法だけでなく、かかわる先生の心の変化を明らかにできると特別支援教育が大きく前進するかもしれないと考えています。

卒業後の自分を振り返ると、教職大学院での「語る」「傾聴する」「書く」「読む」経験が、教育相談に対応する際に大いに役立っているように感じています。そして、今も業務の中で学ぶことが続いていると実感しています。

修了から約1年あまりが経過した今

坂井市立丸岡南中学校 鈴木 秀卓

本校が教職大学院の拠点校に指定され、はや3年目。そして、私が教職大学院を修了して、はや1年あまりが経過しました。

私は、本校で平成19年度・20年度の2年間、研究主任を務めました。教職大学院で学ばせていただいたのは、研究主任2年目の20年度であり、校内研究に関するコーディネート力やマネジメント力などを学ばせていただきました。研究主任として、数々の不安を抱いていた私にとって、教職大学院での学びは、自信とやる気をいただけるものになりました。感謝しています。

昨年度から生徒指導を担当することになり、現在、研究部から離れています。しかし、教職大学院で学んだことは、校内研究や社会科教育はもちろんのこと、生徒指導面におけるマネジメントにおいても生かされていると思っています。以下には、社会科部会内での授業研究（インターンの教科指導を含む）に関することおよび生徒指導に関するマネジメントについて述べさせていただきます。

【社会科指導】

本校の研究主題は、「学び合う環境の創造」です。社会科は、『学び合う』をキーワードに、本年度もグループ活動をメインにした授業の展開を目指しています。各学年、1学期一単元は、ダイナミックな探究型授業を取り入れています。さらに、新たな単元での探究型授業の開発を進めています。このように、社会科教師3名＋インターンの林克磨さんのすべてが、学び合う授業作りに対する意識が非常に高くなっています。特に、今年度の社会科主任を引き受けた宮川教諭は、昨年度の自主研究

発表会の社会科公開授業を自ら引き受け、また、本年度の地区・県の中教研の発表も自ら引き受けるなど、たいへん前向きな姿勢で取り組んでいます。

先にも述べましたが、社会科では、インターンの林さんをお預かりしています。彼も、たいへん前向きな姿勢で日々取り組んでくれており、「授業をさせてほしい。」「1・2時間の授業ではなく、一単元すべてを任せてほしい。」と、たいへん前向きです。写真は、彼が行った授業風景のワンシーンです。大学院の先生方にもご参観いただきました。

【生徒指導】

教職大学院では、研究組織（体制）において、どのようなマネジメント力が必要かも学びました。私たちは、研究のみならず、学校におけるすべての校務分掌上、組織の中の一人間として動かなければなりません。教職大学院で学んだ組織人としての役割および組織上でのマネジメント力が、生徒指導上でも生かすことができているような気がしています。

生徒指導に関する諸問題は、どんなに些細と思われることでも校長・教頭への連絡・報告を欠かすことができません。そのためには、各学年との連携が必要になります。現在、各学年の諸問題が即報告なされるような体制を作ることができています。組織上での縦横のつながりの重要性を知り、現在に生かされているのも教職大学院で学ばせていただいたおかげと感じています。

今後も、教職大学院で学んだことをフルに生かして頑張っ



拠点校研究集会報告

6月4日（金）、この季節らしいさわやかな陽気の中で、今年度も福井大学教育地域科学部附属中学校教育研究集会が開催されました。「学びを拓く《探究するコミュニティ》」をテーマとして取り組んできた3年目の研究集会となります。参加した院生の方々に、それぞれどんな学びがあったのか報告していただきました。

福井大学教育地域科学部附属中学校 教育研究集会に参加して 大野市有終西小学校 川端 英郁

私は、教員になってから、小学校と教育委員会での勤務経験しかなく、今回、教員になって初めて附属中学校の研究集会に参加させていただきました。研究集会に向かう車の中では、附属中学校ってどんな所なんだろう。生徒たちは、授業でどんな姿を見せてくれるのだろう。という新鮮さと期待感でわくわくしていました。

研究集会では、教職大学院M2の竹内先生の1年生学校保健「心（脳）・月経・射精・妊娠の関係を探る！（心身の機能の発達と心の健康）」の授業と自分の専門である保健体育、3年生の「附属カップ開催！みんなで創るフットサルの授業」を参観しました。

特に、保健の授業では、4人の小グループの話し合い活動が中心でした。今まで学習してきたことを出し合いながら、「心（脳）と月経・射精・妊娠の関係」をホワイトボードを使って図にまとめていました。あるグループに的を絞ってずっと見ていましたが、周りにたくさんの参観者がいてもお構いなしに活発に話し合いを行い、素晴らしい関係図を作り上げていました。主導権を持って話を進めていく子が自然と生まれ、でも、少しでも違ったことがあるとしっかりとサポートができる周りの子がいて、というように、4人ともグループの一員として協働の上で学習に取り組んでいるなあと感じました。

私が見たこのグループは、各グループを代表してクラス内で発表をしました。自分たちの話し合いからできあがった関係図を、自信を持って自分の言葉で発表していました。4人で一生懸命知恵を出し合い話し合いながら作り上げたものだからこそその自信でもあったと思います。また、グループ発表時には、発表を聞いている他のグループにも注目をして見ていました。どのグループの生徒も一言一言に耳を傾け一生懸命聞いている姿がとても印象的でした。自分たちが協力して作り上げたものを、クラスのみんなが一生懸命聞いてくれる。発表したグループの生徒は本当に満足だったのではないのでしょうか。

このような子どもたちが満足できる授業を作り上げるには、一朝一夕には無理で前時までの積み上げだけでなく、教育活動全体での取り組みが必要だと思われます。このようなスタイルが探究的な活動を取り入れて課題を解決していく、附属中カラーなんだなあと感じました。今回の研究集会で、また一つ自分の中に新しい風が吹いたように思いました。今年度は、さらに複数回研究会に参加し、自分の見識を深めながら新しい風を求めている。そう思うことができた、附属中学校の研究集会でした。

つながりを感じる

今回の研究集会の最後を締めくくるシンポジウムにおいて、秋田喜代美先生、鹿毛雅治先生、高橋和代先生から、大変すっきりとかつ多くの学びを提供していただ

福井県教育庁嶺南教育事務所 辻村 完

いた。「学び合いは形態ではない」「仕掛け・場をどのように提供するのが大事」「グループがフォーマルでは学び合いはない」「抽象的な言葉での話し合いには、学び

合いは生まれません」など、これまでの学び合いのイメージを覆すようなお考えがいくつも出された。一つの方向に縛られていたものから解放された印象さえ持つようなものもあった。逆にうなずけるものがいくつもあり、自分なりに考えていたものを再確認することができた瞬間でもあった。

今回、強く感じたことは、「つながり」である。「学びにおいて」「生徒同士」「生徒と教員」「教員同士」「学校と社会」……。強制的なつながりではなく、自然なつながりである。義務的なつながりではなく、自然発生的・自由なつながりである。ここでの研究に関わるすべての人が暗黙のうちにつながりを大事にして学びを深めている印象を受けた。

参観した授業においても同様である。公開授業Ⅰ「2A・社会科 どうする日本のエネルギー（塚田教諭）」では、30年後の日本の発電を考えていた。経済面・環境面・安全安定面の3つの視点から火力・水力・原子力・新エネルギーの4つのエネルギーの割合を考えていくものである。まずは、班ごとに既習内容や与えられた資料をもとに、それぞれの発電方法の割合を決めていく。ほかの班の発表内容を自分たちの考えの中に取り込み、自分たちの考えを見直すきっかけがつけられている。すべてが自然にそして自由につながっている状態である。公開授業Ⅱ「1C・社会科 みんなでAPEC附合会議を開こう（森田教諭）」では、地元福井市で開催されるAPECエネルギー大臣会合が題材である。APECの加盟国についての調査活動を通して、世界のさまざまな

地域の学習を進めていくものである。生徒から出された視点は、人口・輸入額にはじまり、乳児死亡率・CO₂排出量などそれぞれの国を理解するのに重要な視点ばかりであった。それらの視点から比較分析を進めていく。そこから課題を見つけ、最終的には開催理由を探ろうというものである。その目標にたどりつくにはかなり困難な状況であった。比較する活動で何も読み取れない班もあった。試行錯誤の連続である。何かを求めよう、何かを見つけよう、そんな姿勢で満ち溢れていた。まさしく生徒同士のつながりが存在する。他の班とのつながりも随所に見られた。福井市とAPEC参加国とのつながりも生まれつつあった。

必然的な課題を設定し子どもの側に立った探究活動の成果が感じられた。研究のサブテーマにある「学びの必然性」の表れである。課題と向き合うことが保障されている学習が確立している。だから「つながり」がある。……。自然な流れの学びを感じることができた1日であった。



子どもの学びの筋をたどる。附属中学校教育研究集会の授業参観とその記録

福井市至民中学校 高間 祐治

今年も附属中学校教育研究集会に参加させていただきました。教師の力量形成の方法として、質の高い授業を参観することは、なにより即効性があり、効果的であると考えています。質の高い授業とは、生徒たちが高度な課題（生徒にとって必要性を感じる課題）にのめり込みそして没頭し、協働で問題解決していく生徒の動きがある授業のことを示しています。そのような授業がこの附属中学校の教育研究集会では展開されているから毎年、楽しみにして参加しているのです。また、授業の参

観スタイルも至民中学校と同じように生徒の学びの筋を追っていくものであり、授業を見取った先生方との分科会は授業者だけでなく、参観者全員の成長を促してくれるからです。

以上のことから今回のレポートは、子どもの学びの筋を見取っていきたいと思います。

1年生数学の空間図形で立体を表現する授業でした。授業者は柴田先生です。4人1班になり箱の中に入っている立体を1人が言葉で特徴を伝えます。2人がその特

徴を聞いて竹ひごと紙粘土で立体を作り上げていきます。1人が付箋に伝えた言葉を記録していく授業で的確に立体を表現することをねらいとしています。それは言葉だけでなく、立体を作って表現することも含んでいます。

7班の活動を高橋君（登場する名前はすべて仮名）が「面の数が4つある」と表現すると小川さんは「わかった」とすぐ手が動き出します。4面でできる立体は限られているためでしょう。次に「面は三角形でできている。すべて」と伝えると森さんは竹ひごを紙粘土に差し込んで三角形を作りながら「辺の長さは？」と問い返します。「すべて同じ」この表現で立体は完成です。小川さんも森さんも正確に正四面体を作り上げて表現することができました。その後、記録の佐藤君が書いた付箋を見な

から「面は三角形と辺の長さはすべて同じの二つの表現は正三角形と言ってしまえば1つにまとめられたね。」と少ない情報で的確に表現することの大切さを4人で共通理解していました。4人がそれぞれの役割を担い、立体を表現すると目標に向かって協働的な学びが展開されていました。

生徒の学びの様子をすべて書き表すことは字数の制約でとてもできませんが、分科会でもそれぞれの先生方が子どもの学びの様子を語り、授業の本質を探っていました。このように生徒の学びに注目した授業参観スタイルが広がってきていることをうれしく思うのと同時に、生徒の学びを語り合えた分科会で互いに実りある成長を遂げられたことに感謝しています。ありがとうございました。

子どもも教師もともに「学び合う」学校文化

福井県立美方高等学校 滝 民恵

附属中学校研究集会に昨年度、本年度と参加させていただいた。教職大学院に入学する以前にも参加させていただいたことはあるのだが、公開された授業に感動するばかりでその本質を見ていなかったなと感じる。今年度、授業を参観し分科会で参加された先生方と協議する中で、子どもたちの学び合いについて深く考えることができた。私は、技術・家庭科の授業を参観したのであるが、研究協議の中で「学びの必然性」について議論でき、高等学校の授業においてはどのように展開できるだろうかということを考えさせられた。

また、高橋和代先生（附属中学校研究主任）、秋田喜代美教授（東京大学大学院教育学研究科）、鹿毛雅治教授（慶應義塾大学教職課程センター）によるシンポジウムを傾聴する中で、自分自身のこれからの取り組みについて示唆を与えていただいたと感じる。学校は子どもたちが学び成長していく場であるが同様に教師も学び成長していく場でもある。『学びを拓く＜探究するコミュニティ＞』を研究主題として目指す理想とする学校の在り方を探ってきた附属中学校の取り組みは、子どもたちが授業の課題を協働で探究するのと同様に、教師集団も

これまでの経歴や年齢、教科を超えて協働探究のデザインを追究しているのである。このように、子どもも教師もが学び合い、探究し合う関係が築かれている学校文化が創造され、持続可能であるという点に感銘を受けた。

シンポジウムの中で教授が語られた「教師の学び合いはどこから生まれるのか。それは、まず実践記録を読み合うことからである。抽象的な言葉を論じている時には学び合いは起こらない。実践のディテールは多様であり、実践に関わる研究は複雑で専門的であるが、授業実践や取り組みについて協議している時に学び合いが生まれるのである。」ということや「子どもが問おうとしない限り、子どもは学び合わない。子どもが知りたくなるような課題設定をすることが重要であり、課題に①価値②見通しがあると動機づけになりやすい。学びの必然性が子どもの側にあるのか。」と語られたことが非常に印象に残っている。ここで、学んだことを勤務校に還元しこれからの研究実践に活かしていきたいと考える。

専門職として学び合うコミュニティ/ 実践研究福井ラウンドテーブル 2010 開催

福井大学教職大学院
ラウンドテーブル 2010.6 実行委員

福井大学では、毎年、様々な教育現場における実践報告を語り、聴き、学び合う「ラウンドテーブル」を6月と3月に開催しています。今年2月には、今後の教師教育改革を視野に入れ、学校教育における協働研究をテーマとしたラウンドテーブルを企画し、250名を超える方々に参加していただきました。今回のラウンドテーブルは、学校教育のみならず、様々な領域において進められている実践研究の取り組みを共有し、学び合う場となるよう企画しました。この2日間は、実践研究の新たな展開へ向けた実り多い学び合いの機会となることを期待しています。みなさまの積極的な参加をお待ちしております。

2010.6.26 (sat) 専門職として学び合うコミュニティ

学校教育、社会教育、福祉・特別支援、医療・看護の4つの領域に分かれて、実践の歩みを共有し、語り合います。

1. 専門職として学び合うコミュニティとしての学校— 協働研究の展開と編成—

学校教育において、教師たちはどのように協働研究を展開、編成しながら学校づくり・授業づくりを進めていくのだろうか。また、学校づくり・授業づくりを中核とした教師たちの協働研究は、学び合うコミュニティとしての学校をどのように構築、活性化し、教師の専門的発達をどのように支えているのだろうか。これらの論題(issue)を探究するために、本領域では、長期にわたって協働研究を展開、蓄積してきた学校の取り組み、既存の学校組織を転換し、学び合うコミュニティの構築に挑戦している学校の取り組みから学んでいきます。

学校における協働研究の展開を報告いただくのは小学校2校、中学校4校、高等学校2校で、以下4つの分科会を設けて各学校の実践を傾聴、議論し、共有していきます。

- A. 岐阜市立長良小学校 (岐阜) おおい町立名田庄小学校 (福井)
- B. 福井市灯明寺中学校 (福井) 福井大学教育地域科学部附属中学校 (福井)
- C. 福井市至民中学校 (福井) 美浜町美浜中学校 (福井)
- D. 啓新高等学校 (福井) 金沢大学附属高等学校 (石川)

2. コミュニティの学習を支援する専門職

日本社会教育学会において、コミュニティの学習を支援する専門職の力量形成をどう実現していくか、そのために大学はどのような役割を果たしていくべきなのかという研究が重ねられてきています。実践の場での省察とそれを共有し積み重ねていくサイクルをどのように編成しさらにそれを広げていくことができるか。今回のセッションにおいては、実践の場での省察とその交流を重ねてきた実践者に、その長い歩みを語っていただきながら、そうした省察的な実践の共有と積み重ねの基盤を発展させていく具体的な展望について問いを進めていきたいと思えます。新しい形での社会教育主事講習の組織化が一つの具体的な糸口となります。

報告者：三輪建二氏 (お茶の水女子大学) / 村田晶子氏 (早稲田大学) 他

3. 特別なニーズのある人との係わり合いから何を学ぶか

—体験事実の共有と新たな実践の創造に向けて—

係わり手の有する条件の違い（職種、立場、年齢、経歴、係わり合いが行なわれる場所・場面、方法等）や、係わられ手の有する条件の違い（年齢、障害種、障害の程度、状態像等）を越えて、共有できること、共有すべきこととは何か。範例としての係わり合いとはいかなるものか。他者の体験事実を共有し、自分の体験事実と重ね合わせることを通して、自身の実践を見つめ直す。参加者それぞれが、新たな係わり合いの創造・展開に向けての一步を踏み出すための場としたいと思います。

全体会：岡澤慎一氏（宇都宮大学教育学部）

分科会：荒木良子氏（福井県立南越養護学校） / 笠島真須美氏（福井県立南越養護学校） /

見谷文子氏（福井県立東養護学校） / 小杉真一郎氏（福井市教育委員会） /

瓜生幸行氏（福井県立嶺北養護学校） / 吉田茂氏（光道園ライフトレーニングセンター）

三好博子氏（光道園ライフトレーニングセンター）

4. 医療・看護の専門職における実践力形成

医療・看護分野での専門職としての実践的力量形成の課題は、教員力量形成と非常に共通する面があります。学部段階の看護職養成から大学院での教育、さらには看護師として社会に出てから各医療機関において生涯にわたる専門職としての力量形成の課題は非常に重要なテーマとなっています。今回は、それらを含む、生涯にわたる看護職の実践的力量形成のデザインを参加者ととも考えていきたいと思っています。

報告：福井大学医学部看護学科 他

2010.6.27 (sun) 実践研究福井ラウンドテーブル 2010

2日目は、分野を越えたクロスセッションで、4～5人の小グループで実践の歩みを語り合い、聴き合い、学び合います。福井大学教職大学院の院生だけでなく、県内外の様々な領域の方から、実践報告をしていただく予定です。また、午後からは今回のラウンドテーブルの振り返りと、今後の方向性についての話し合い等を予定しています。

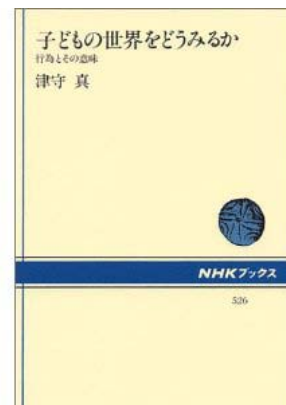
今回のラウンドテーブルへ参加しての感想等を、以下のアドレスまでお寄せください。みなさまのご意見、ご感想をお待ちしております。

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻（教職大学院）：dpdtfukui@yahoo.co.jp

子どもの世界をどうみるか—行為とその意味 津守真 NHKブックス 1987年

岸野 麻衣 (福井大学教職大学院)

修士課程の院生だった頃、愛育養護学校に毎週1日通い、子どもたちと時間を過ごさせてもらった日々を思い出す。ある日、一緒に過ごしていた女兒が、校内に入ってきた男性にすーっと寄っていき、手を取って遊び始めた。私は慌てて付いていく。彼女は床に画用紙を広げ、緑色の絵の具を指につけてペタペタと画用紙に付けていった。一面に小さな緑色の指の跡が残っていく。当時毎日のように描いていた木のモチーフだ。茶色で木の幹も描かれ、見事なフィンガーペインティングができあがっていく。彼女は男性の手にもべったりと絵の具を付けた。男性は穏やかに一緒にペタペタと描き始め、静かな充実した時間が展開した。この男性こそが愛育養護学校の元校長、本書の著者津守真先生だった。



本書には、そんな著者がいかにして子どもを理解してきたか、丁寧に書かれている。第1章では、初めて絵を描いたときから就学後までの一人の子どもの絵を取り上げて、子どもの体験が表現されたものとして受けとめ、その意味を理解していく過程が開示されている。第2章では、養護学校で子どもと共に過ごす中で起きた出来事を取り上げて、自身の保育実践が省察されている。印象的なのは、自身の失敗したエピソードをも語られていることである。周りの目を気にして子どもに真に向き合えずに戸惑う事例や、子どもと築いていた信頼関係を一瞬にして無にしてしまった事例。自ら実践を真摯に振り返り、子どもの行為の意味を読み解き直していく。その背後には、同僚と共に実践を語り合い、共に省察を深めていく場と関係性があることが読み取れる。終章では、児童心理学の研究が概観され、多くの研究が子どもを客観的に捉え、測定によって発達過程を明らかにしてきたことに対して、子どもの体験を置き去りにしない人間学的な児童心理学の必要性が述べられている。

固定観念で子どもを理解するのも、大人が必要だと思うことをさせるのでもなく、今ここで子どもがしようとしていることに目を向け、その意味を理解しつつ関わっていく。関わりながら省察を重ね、理解と関わりを深めていく。本書で論じられているこれらのことは、障害のある子どもだけでなく、不登校や非行など「問題」とされる行動を示す子どもや、日々出会う多様な子どもたちに対する自分の理解の仕方や関わり方を見直すヒントになるに違いない。

Schedule

- | | |
|---|---|
| 6/26 sat 専門職として学び合うコミュニティ (13:30-17:00) | 8/2 mon - 4 wed 夏の集中講座 2a (9:30-17:00) |
| 6/27 sun 実践研究福井ラウンドテーブル (8:45-14:20) | 8/5 thu - 7 sat 夏の集中講座 2b (9:30-17:00) |
| 7/3 sat 教職開発専攻(教職大学院)入試事前説明会 (15:00-17:00) | |
| 7/10 sat 合同カンファレンス (9:30-12:30) | 8/16 mon - 18 wed 夏の集中講座 3a (9:30-17:00) |
| 7/21 Wed -23 fri 夏の集中講座 1a (9:30-17:00) | 8/19 thu - 21 sat 夏の集中講座 3b (9:30-17:00) |
| 7/27 tue -29 thu 夏の集中講座 1b (9:30-17:00) | ※集中講座は1・2・3それぞれabどちらか選択(abの組合せ自由) |
| 8/1 sun -2 mon 教育のアクションリサーチ研究会 @熱海 (任意参加) | |

[編集後記] 今年度に入って4回目のニュースレターを発刊しました。各学校においては、6月は最も多忙な月であるとともに、最も教育活動の充実が求められる月です。その意味で、本号に掲載されている様々な学校や先生方の真摯な取組は、生きた学びの教科書であるといえます。そこから議論し、交流し、学び、振り返るといった省察的な実践とそのコミュニティを自覚的に培っていききたいものだと思います。(津田由起枝)

教職大学院 Newsletter **No.23**

2010.06.25 発行

2010.06.25 印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdtkufui@yahoo.co.jp